



目次①²

9回裏のきみへ 007

野正レイ

by 紺坊主

#純愛 #イチャラブ #中出し #淫語

心に生まれたバグの名前は 025

天童ケイ

by コンポタ

#女性上位（前戯） #一部シリアス #中出し #純愛 #初体験
#♡喘ぎ #尿道責め

エロゲー開発だいさくせん! 045

天童アリス

by a-su

#乙女の誘惑 #甘々初体験 #無知→叡智 #ハーレム #早瀬ユウカ

キヴォトス・未確認ミステリー2 ～東アルプスに飛ぶ謎のUFO大調査～ 061

羽咋ツバサ

by ヨッシー

#イチャラブ #フェラ #愛のあるセックス #あまイキ #中出し
#どんと来い、超常現象

いたずらウサギ 075

黒崎コユキ・生塩ノア

by ミ浦かがみ

#純愛 #拘束 #目隠し #監禁 #百合 #調教 #コユキちゃんかわいい♡

Chest & Cumshot 093

室笠アカネ

by ナシ・アジフ

#ソープごっこ #パイズリ #騎乗位 #キスハメ #お掃除フェラ
#精飲

情欲ヘイタルエラー 109

早瀬ユウカ

by まーぼーどーふ

#おねショタ #精通 #手コキ #フェラ #正常位 #純愛

目次②

懲罰マシンは無慈悲にマイスターを弄ぶ 129

猫塚ヒビキ by らな2

#機械姦 #くすぐり地獄 #連続絶頂 #拘束

各務チヒロは戻れない 145

各務チヒロ by 伊豆ジャルゴン

#オホ声 #オナニー #VR #複数姦 #モブ姦

境界線を、越えて 157

豊見コトリ by チマネコ

#純愛 #初体験 #乳首舐め #パイズリ #騎乗位 #中出し

KONURI'S GRAFFITI ～WHITE OUT～ 171

小塗マキ by Silver師匠

#純愛 #イチャラブ #乱交 #5P #中出し

乙花スミレの快樂耐久トレーニング! 187

乙花スミレ by 七篠ナisho

#乙花スミレ(アルバイト) #売り子 #膣トレ #入れっぱなし

#オナニー #羞恥 #焦らし #絶頂我慢

「ナマ」で欲しいです。 205

花岡ユズ by 後無しズ

#花岡ユズ(臨戦) #通常衣装 #VR #オナバレ #隠姦 #和姦

#誘い受け

清純派超天才明星ヒマリがオホ声で喘ぐなんてことはありませんとも 217

明星ヒマリ by アラベスク

#オホ声 #純愛 #イチャラブ #愛のあるセックス #誘い受け

#ルビ芸

踊る姉妹の指先 <嬌笑響く操宴> 229

才羽モモイ・才羽ミドリ by キノコアザラシ

#くすぐり #乳首責め #クリ責め #連続絶頂

禁忌肢 243

一之瀬アスナ by 白鷺ナギ

#女性上位 #騎乗位 #ワンちゃんプレイ #シリアス

自動的な恋 Automatic Love 259

白石ウタハ by ソメガミ イロガミ

#純愛 #メカノフィリア #異種和姦 #機械姦 #機械触手
#露出(未遂)シチュ #羞恥

青ウサギの部屋 ~ラブ・ボードゲームやってみた~ 269

飛鳥馬トキ by 羽中

#エロ配信 #ボドゲ実況 #エロすごろく #ゆるギャグエロ
#チャンネル登録お願いします

Beauty sweet Tonight 281

美甘ネル by リュシス61

#メイド服(コスプレ) #純愛 #いちゃらぶ #着衣エッチ

部屋に一つのハレ日のような暖かさ 297

小鈎ハレ by 貞明み木

#いちゃらぶ #フェラ #初体験 #中出し #精飲

ご主人様、嬢のお時間ですよ♡ 307

才羽ミドリ by 夜戦

#才羽ミドリ(メイド) #甘サド #女性上位 #男性受け #主従逆転
#ペニバン #メスイキ #お姉ちゃんには内緒ですよ

目次④

逆境体感VRで過酷なモモイの災難 325

才羽モモイ

by 埴輪

#VR #過酷 #全裸 #拘束 #羞恥 #クソゲー #おさわり #調教

同棲中のエイミといちゃこらす話 339

和泉元エイミ

by ぶんき

#イチャラブ #パイズリ #同棲

新妻カリン(26)に子作りを迫られる話 355

角楯カリン

by 北山カノン

#妊活 #妊娠 #結婚生活 #純愛 #ちょっとシリアス

ミライへ 373

吾妻ミライ

by 常磐

#機械姦 #連続絶頂 #金ビキニ #純愛? #中出し

NEW WORLD ORDER 387

調月リオ

by 都部京樹

#調月リオ(臨戦) #純愛 #♡喘ぎ #後背位 #言葉責め
#乳内射精 #キス #パイズリ #バストサイズ申告 #ルージュリング
あなた

福音を私に 407

音瀬コタマ

by 対馬

#モブ男性 #非NTR #妊娠・出産 #甘タイチャラブ

揺らめく幕が明けたら 425

生塩ノア

by 夏橘らね

#純愛

説明します♡



サツとする？ じっくりする？

セックスの平均時間

お疲れ様です、先生。コトリです！ 今回はいつもの説明の出張版ということでお邪魔させていただいてます。そのお……普段はあまり「そういうコト、の説明ってしにくいのですが、ここなら……♪

フィクションでは「一晩中」や「朝まで」と長時間のセックスを敢行することも少なくありませんが、実際はどうなのでしょう。どのくらいの時間が良いのか分からず悩むカップルも多いそうです。ユナイテッドクリニックが20代～50代の男女800人対象に行ったアンケートがありますので、全年代の平均を中心にをご紹介しますね。

①セックス全体にかかる時間：最多は30分～1時間

男女間でのギャップが少なく、女性は約50%、男性は約60%がこの時間帯を答えているようでした。20代の男女は「1～2時間程度」を答えた人が他の年代と比べてやや多く、体力の豊かさが窺えます。

②男性から女性への前戯の時間：最多は10分程度

多くは5分程度～20分程度に収まっており、「10分程度」が全体の35～40%程度です。男性は「20分程度」の回答が女性よりやや多く、前戯への意識に少々男女差があるのかもしれませんがね。

③女性から男性への前戯の時間：最多は10分程度

こちらは3割近くが「できればしたくない」と答えており、特に30代以降にその傾向が顕著です……。

④挿入にかかる時間：最多は10分程度

こちらは女性の理想が年代によって分かれており、「10分程度」の次は20代が「20分程度」、それ以降は「5分程度」との傾向ありです。これは③と併せて、妊活によるセックスの義務化が背景にあるのかもしれませんがね。

——先生、そろそろ私たちも……あつ、脱がしてくれるんですね。お手柔らかにお願いします……♡



9回裏のきみへ

……先生、

野球の練習に

付き合ってもらってもいいですか？



Featuring

野正レイ

#純愛

#イチャラブ

#中出し

#淫語

Written by

紺坊主



X(旧Twitter)

@com_bo2



pixiv ID

98486780

夜の球場が逆転サヨナラホームランの熱気に包まれた瞬間だった。

「わ~~~~っ！ いまの見たか、先生っ!」

外野スタンドにボールが飛び込むと、座席からびよんと跳ね上がったレイが、そのまま隣に座る私に抱き着いてきた。

ほどよく引き締まった体つきと、ふにと柔らかな胸の感触が伝わることもお構いなしに、ぎゅっと体を押し付けてきて。

「——あ、すみません、興奮しちゃって、つい……——でも、いまの見たかっ! あのパッター、膝をつきながら、こう、すくい上げるようにホームランを打ちましたよ！ あんなの見たことないですっ!!」

一塁ベンチ側の席に並んで座るレイは、バッターのスイングを真似しながら興奮気味に話す。

野球が大好きな彼女らしいそんな仕草に、私は思わず頬が緩む。

レイとは彼女がホームランを打つための練習に付き合ううちにすっかり打ち解け、いまでは練習終わりに一緒に野球観戦をするまでになっていた。

「先生、私もあんな風にホームラン、打てるように頑張りますねっ!」

「ふふ、応援してるよ」

9 回裏の劇的なサヨナラホームランを目にした彼女の瞳は、

星を散りばめたみたいにキラキラと輝いている。

野球を語るときのレイは、いつだってイキイキしていて、いつだって輝いている。

そんな彼女だからこそ、私は野球が好きになり、レイとの日常が好きになり、レイのことが好きになっていったんだと思う。

「——先生、あの……」

だから私は、レイからの申し出に喜んで頷いた。

「今度、私がホームランを打ったら、聞いてもらいたいことがあります……!」

新緑の匂いが濃くなる、梅雨に入る前の季節のことだった。

それからあつという間に季節は流れ、冬のオフシーズンが二日後に迫ったある日。

「——飛んだ！ これは大きい……!」

興奮したアナウンサーの声が聞こえる。白球が描く放物線はぐんぐんと飛距離を伸ばし、大観衆で埋め尽くされた外野スタンドに吸い寄せられ——。

「タイガースラッガーズ！ 最後の最後で、逆転サヨナラ満塁ホームランです!!」

縦縞のユニフォームを着た選手が、拳を突き上げながら三塁ベースをまわり、ホームで待っていたチームメイトたちから手荒い祝福を受ける——。

TV画面に映る9回裏の劇的な幕切れに、私はレイに借りた選手名鑑を持ったままバタツとクッシヨンに倒れ込む。

結末に心奪われているのはレイも同じらしかった。

「……凄かったですね、いまのホームラン」

「うん、チャンスに強いバッターだってレイが教えてくれたんだけど、さすがにこんな結末になるのは想像もしてなかったよ……！」

我が家のコタツに入っているレイの言葉に、私もまくしたてるように返す。

プロ野球のシーズン最後を飾る優勝決定戦。二勝三敗で追い詰められたタイガースラッグーズは最後の最後、9回裏に逆転サヨナラ満塁ホームランを打って、勝敗を五分に戻した。明日ついに優勝チームが決まる。

そんな手に汗握る試合を、私は自宅でこじんまりとしたコタツに入りながらレイと一緒に観戦していた。

「レイ、選手名鑑ありがとうね。やっぱりレイの書いたメモを読みながらだと、試合がすごく面白くなるよ」

「へへ……先生にそう言われると、ちょっと照れますね……」

「ふふ、本当にすごいよ、レイのメモ」

寝転んだまま、レイの分析がびっしり書き込まれた選手名鑑をばらばらとめくる。

データを基にした緻密な分析と、実践から得られたホームラ

ンを打つための気づきが書かれた、レイの努力が詰まった一冊。その努力のひとつひとつが思い浮かぶくらい、レイとは長い時間を過ごしてきた。

シャーレの当番、野球の練習、野球観戦……。

レイと一緒に野球に打ち込む日常は、明後日レイが出場する試合を最後に冬のオフシーズンに入り、しばらくお預けになってしまう――。

だから、レイからの提案はたまらなく嬉しかった。

「……先生、野球の練習に付き合ってもらってもいいですか？」
「ふふ、ホームランを見てしたくなかったの？ 待ってて、明日からの予定は……」

スケジュールを確認しようと体を起こすと、いつの間にかレイは間近に迫っていた。

「……いまからです」

そう言って、彼女は遠慮がちにそっと抱き着いてきた。球場で抱き着いた時とは違って、『すみません、つい』とは言わなかった。

レイはいつも着ているスタジャンを着ておらず、パーカー越しだとむにゅっとひしゃげる胸の柔らかな感触も、可愛らしいサイズ感もよりくつきりと感じられる。

それを素直に味わってしまうことに葛藤はある。

あの時、球場で彼女が言った、ホームランを打ったら聞いて

もりたいこと。それをまだ聞けていない。

きつと、聞いてからこういうことはしたほうがいい。

でもそんな先生としての声とは別に、私の胸にはもうひとつの声が響いていた。

「……レイ、甘えなくなっちゃった？」

「と、特訓です……ええつと、腕の力の……」

「そっか。なら、もう少しちゃんと腕回さないと」

「い、いいんですか……?」

「いいよ、おいで」

レイの遠慮をほどくみたいに小柄な体を抱き寄せ、背中に優しく触れる。

華奢に見えても、しなやかな筋肉の弾力が感じられる。

「ほら、レイも遠慮しないで」

「は、はい……!」

私の力加減にあわせるように、レイも腕にしっかりと力を込めて密着してくる。

柑橘系のさっぱりとした匂いに混じって香るのは、ほんのりと甘い少女の匂い。

そのまま、私たちは互いの感触を味わうように黙ったまま抱き合う。

薄い生地越しに感じるぽかぽかと温かな体温も、引き締まりつつも柔らかな感触も、すべてが愛おしい。

そう思えるくらい、レイとは長い時間を過ごしてきた。

だから、たとえホームランをまだ打っていないなくても——彼女が言った『聞いてもらいたいこと』を聞いていなくても、こういうことをしたいと心から思っている。

そんな想いをこめて、レイのことを少しでも強く抱きしめると、

「せ、先生、その……も、もつとすごい特訓……しても、いいですか……?」

レイは上目遣いでそう言う。

快活なレイが消え入りそうな声で言った『すごい特訓』が分からないほど、私は鈍感ではなかった。

「それじゃあ、先にシャワー浴びて——」

「こ、このままでいいです、から……つ」

そう言つて必死に抱き着いてくるレイ。健気な彼女が愛おしくて、自然と心がほころんだ。

「レイは練習熱心だね」

「か、からかわないでください……」

「ごめんごめん、ほら、顔上げて」

「え……—あ」

無防備だった少女の唇にちゅつと初めてのキスを交わす。

さっきまで飲んでいたレモネードの甘酸っぱさが残るキスだった。

唇が離れてようやく意識が追いついたのか、レイはみるみる頬を桃色に染め上げていく。

「こ、これから練習なのに、甘やかしてもいいんですか……?」

「甘やかしてるんじゃないよ、応援だよ。応援。本当の練習なら声で応援するところだけど……ここは私の部屋だからね。声の代わりに、キスでいっぱい応援してあげるね」

そしてまたぶると柔らかな唇にそっと口づける。

唇が触れ合う優しいキスだけで、レイは顔をほーっと蕩けさせている。

「頑張れそう?」

「は、はい……がんばります……♡」

そう言って張り切るレイと一緒に寝室に行って、練習を始めたのだけれど――。

「――無理……♡ 無理ですって……♡ ああああ♡♡♡」

裸のレイはあっさりと音を上げてしまう。

「ふふ、レイって敏感なんだね。まだ触ったばかりだよ?」

「だ、だって……っ」

大きく脚を開いたまま内ももを触られたレイは、情けないくらい弱々しい声をあげる。

服を脱いだ私は裸のレイを膝の上に乗せて、後ろから抱きしめたまま、今度は感触を確かめるようにそっと内ももを撫でる。

レイ本人は四番バッターとして筋力不足と思っている脚は、

もっちりとした女の子らしい柔らかさが残りつつも、肌に沈み込む指を押し返す力強さを感じられる。

そんな努力の証であり、普段から惜しげもなく露わになっていた魅力的な太ももを、こうして遠慮もなく触っていると思うと、それだけで興奮を煽られる。

「ひうう……♡ せ、せんせえ……これ、恥ずかしすぎますよお……」

「あつ、ほら、脚閉じないで。股関節のストレッチでもあるんだから」

レイに脚を開くように、太ももをぼんぼんと優しく叩く。レイは恥じらいの色が濃くても、閉じていた両脚をゆっくりと開いてくれる。

「……そういえば、今日は湿布貼ってないね」

「て、テープですか……?」

レイの両脚にはいつもリカバリーのための湿布がいくつも貼ってあるが、いまは一枚もない。

「えっと、その……せ、先生と、ふたりきりになるときは……」

貼らないように、してるんです……」

「そっか、嬉しい。今日はいっぱい触ってあげるね」

そう言って、私は太ももを愛おしく撫でながら無防備なレイの横顔にちゅつとキスをする。

「――ひゃううっ♡ キス、反則です……」

「仕方ないでしょ。レイの反応が良いから」

「ま、またそうやってからかって……」

「本心だよ」

「あん♡ もう、むり、無理ですってえ♡」

「頑張れ」

応援の言葉とともに、ちゅちゅつとキスの雨を降らせていき、

「——ひゃうっ♡」

ほんのりと汗ばんだ首筋にキスをする、レイはとびきり甘い声を上げる。

「せ、せんせえっ、そ、そこは……だめ……♡ んんっ♡ そこ、

汗かいてる、から……っ」

「ふふ、いまからシャワー浴びてくる？」

「んん♡ こ、断れないの、知ってて、言ってますよね……？」

「ず、ズルいです、先生……」

「私は全然気にならないよ。むしろ、レイの頑張った証だから、全部受け入れてあげたいな。もちろん、レイのエッチな匂いも」

「き、気付いているなら、早くしてくださいよ……！ せ、先生

のここだって、こんなになってるのに……♡」

膝の上に座るレイは、お尻を揺らして隆起した男性器に意識

を向けさせる。

むちゅと弾力のある感触にさらに勃起しかけるが——。

「いまはレイのための練習なんだよ？」

「うああ……♡ ま、またキス、しながら……♡」

レイを責めることに意識を集中させて、内ももを撫でていた指先をゆつくりと秘部に向かって這い上がらせる。

「ああ♡ そ、そこっ♡ ツツ……♡♡」

ぶつくりと肉厚な大陰唇へ指先が迫る。レイの甘やかな声は、期待に震えるようだった。

いよいよ触ってもらえる。レイの期待がピークに達したところで、私はそつと指を離す。

「え……」

レイの落胆の声をあえて無視して、私は再びレイの内ももをゆつくりと撫でる。

そしてまた指先をそつと秘部へと向かわせ、寸前のところで離す。

「うう……っ！ せんせえっ、せんせえ……っ！ ま、まだ焦

らすんですかあ……っ」

「ほら、レイは前に『際どいボール球に手を出す癖がある』って言ってたよね。だからこれは、打ちたがりな癖を我慢する特

訓」

「で、でも……これ、いつまで……——んん……♡♡」

指先を近づけて離すことを何度も何度も繰り返す。咲きはころんだ秘裂からはおねだりするみたいに愛蜜がとぶとぶと溢れている。

「はあっ♡ はあっ♡ せん、せえ……っ♡」

すっかり発情してきたレイは、へこへこと媚びるみたいに小さく腰を振ってしまっていた。

「お、お願いです……そ、その……触ってくださいっ♡ ずっと焦らされて……身体、むずむずしちゃってます……♡」

そう言いながら、レイは『ここを触って』とばかりに、すりと秘部を擦り付けてくる。

「ふふ、ダメ、まだ我慢だよ——って、本当は言うつもりだったんだけどね」

野球少女のレイからこんな風に男を誘う仕草をされたら、さすがにこれ以上はこちらの理性も保ちそうになくて、

「——ひゃううっ♡♡」

不意を打つようにレイのぶくつと膨らんだクリトリスに触れる。それだけでレイは絶頂せんばかりに背を仰け反らせる。

「レイのここ、ひときわ敏感みたいだね。シコシコに硬くなつたエッチなクリトリス、そんなに触ってほしかったの？」

「や、やあ……っ、そんな風に、い、言わないで、ください……っ♡ んんんッ♡♡」

私の身体に擦り付けておきながら、素直に認めないレイ。そんな彼女の心を開きたくて、少しだけ意地悪をしなくなってしまう。

「レイのクリトリス、こんなに敏感なんだから、普段ひとりで

するときも、ここ触ってるの？」

「え、え、ええ……っ！ そっ、そんな恥ずかしいこと——ひいひいんっ♡」

私はレイの恥ずかしいくらいピンピンに勃つた陰核を優しく、けれど追い立てるように爪先でカリカリと擦る。

「クリっ♡ クリ、だめですっ♡♡」
「がんばれ」

私は応援の言葉とともに、レイの口を唇で塞ぐ。

「んんううっ♡ んふっ、んんっ♡ んんんっ♡♡」

いつ終わるかも分からない執拗な焦らしから一転、レイはひときわ敏感な部分を責められ、ふーっ、ふーっ荒く鼻で息をしながらぐもつた嬌声をあげる。

それでも私の舌に自分からチロチロと舌を絡ませ、唾液を交換してくる。

そんないやらしい行為に酔いしれたのか、レイの顔は淫靡な色に染まり、抱きしめている身体は興奮で赤らんでいた。

「……ほら、これでもう言える？」

「んんっ♡ ゆ、指、まつ、待って、くださいっ♡」

「本当に、待っちゃっていいの？」

「うう……い、意地悪です……」

レイは私の手に触れると——。

「んんっ♡ いう、言います、からあ……♡」

そのまま私の指をそっとクリトリリスの前に導いた。

「い、いっぱい、触ってください♡ 私の、エッチなクリトリリス……♡」

その言葉を合図に、私の指先が期待ですっかり勃っていた肉芽を転がすと、レイはビクッと身体を震わせた。

そして、レイは宣言通りに淫らな習慣を打ち明ける。

「はあぁ〜っ♡ そんなせえと練習した日は、毎日っ♡ こんなふうに♡ クリオナ♡ してますう♡♡ なんあつ♡ こんなふう♡ 勃起クリ、ぐりぐりして……—ふうん♡ い、いっぱい気持ちよく、なってますう♡♡」

私の手を使って、押し潰すようにクリトリリスをこねる。いやらしくピンピンに膨らんだ陰核がグニグニと形を変え、その度レイは腰を跳ねさせる。

「ふふ、レイはこういうふうに体のケアをしてたんだね。ねえ、どんなことを想像しながら……—ううん、違うね。どんなイメージトレーニングをしながらこうしてるの?」

「あつ♡ そんなせえの指♡ 動いて……♡ なんっ♡ せ、そんなせえに、褒められながら♡ 本番、してるところ、想像しますっ♡♡」

「こんなふうにな?」

「あ……—んむ、ちゅむ♡」

頑張れの言葉の代わりにレイの唇を塞ぐ。唇の隙間からそつ

と舌を侵入させると、レイは夢中になって熱い舌を絡みつかせてくる。

「レイ、素直に言ってくれてありがとう。いつも頑張ってるいよ」

キスの合間に褒めると、レイはその褒め言葉をオカズにするようにクリトリリスをぐりぐりこね回し、絶え間なく体を刺激し続ける。

「そう、です♡ こんなふう♡ んちゅ、ふうっ♡ じっくり、してます♡ ちゅぶ、ちゅうっ♡ ちゅ、ちゅる♡ ふうん♡ ちゅる♡ ちゅ、ちゅちゅ♡」

ぐぐもった喘ぎ声を漏らしながらも、キスを解くどころか、レイは『もつ♡ もつ♡』と、ますますいやらしく舌を抱きつかせ、ねちゅねちゅと粘っこい水音を響かせる。

そして、レイは無意識にだらう。むちつとハリのあるお尻をふりふりと擦りつけてきて、陰茎を刺激してくる。

それが馬鹿みたいに気持ちよくて、私も堪えきれず、ぐりぐりと押し返してしまう。

そうなると、彼女もますます行為に耽っていく。

「んふうっ♡ いふ♡ なんっ♡ いふふ♡ んちゅちゅるくちゅ♡♡」

さらに夢を語っていた野球少女はすっかり快樂の虜になり、絶頂に向かって身体を荒ぶらせている——。

そんな風に夢中になってくれる愛おしきとともに、いけないことを教えているような背徳感にどうしても興奮している私は、もっと先を望んでしまっていて。

「あ……せ、せんせえ、なんれ、キス、やめちゃうんですか……」

キスを途中で切り上げると、レイは舌先からつうーつと唾液の糸を垂らしたまま、上目遣いで見つめてくる。

野球を語るときのきらきらとした瞳とは違う、快楽で蕩けきった熱っぽく潤んだ瞳で。

「も、もしかしてまた……我慢、ですか……？ も、もう、我慢はイヤ、です……」

そう言っ、レイは腰を揺すって甘えるように秘部を擦り付けてくる。

「我慢はもうさせないよう」

「あ……♡」

「レイには指じゃなくて、私のこゝでイッてはしかったんだ」

私は限界まで張りつめた肉棒を淫液で濡れた割れ目にすりすりとなすりつける。

「まだホームラン打ってないけど……いままでいっぱい頑張ったレイに、ご褒美あげてもいい？」

「はあ♡ いい、です♡ いいです、からあ♡ ぬぶぬぶって♡ そこ、焦らすのため、です……♡ ううー♡♡ そ、

それだけで……♡ イっちゃいます、からあ……」

私の膝の上に座っていたレイは我慢でなくなったのか、どさつとベッドに身を投げだす。

その拍子に、レイの形のいい胸がぶるつと揺れて、その谷間から汗粒が垂れ落ちる。

「せ、せんせえ……いまはおっぱいじゃなくて、こつちを……」

そう言っ、レイは恥ずかしそうに両脚をそつと開く。

さつきまで私の指がぐちゅぐちゅにしていた秘所は、お預けされたことに抗議するようにとろとろの蜜で濡れそぼっていた。

「み、見るだけじゃなくて、その……せんせえの、ください……せんせえの、お、おちんちん……♡」

夢に向かって真っ直ぐなレイの口から淫らな言葉が紡がれるとともに、彼女は自分で花園をくぱあと開いてみせる。夜の微かな明るさの中でもわかる、鮮やかな桜色の媚肉がいやらしくひくついている。

レイはよほど恥ずかしいのか、ふいっと顔をそむけてしまう。それでも秘所を上げたままにしているレイの姿に、もう我慢はできなかった。

「じゃあ挿れるね」

「は、はい……♡」

我慢の練習とレイに言いながらも、私自身もずつと挿れた

かったぶにぶにの割れ目について挿入する——。

興奮で冷静さなんて吹き飛びそうだった。それはレイも同じみたいで。

「はあっ♡ うあ……♡ おちんぼ、来る……っ♡」

熱に浮かされたような瞳は、いままさに蜜穴に侵入しようとする異物に釘付けになっていた。

その熱視線だけでさらに勃起してしまいそうだ。

私はレイの期待に背中を押され、小さな穴を亀頭でこじ開けて、

「はあ、あああ~~~~っ♡」

「うくう……ッ」

ぶつつと薄紙を破るような感触はあったが、抵抗はほとんどなかった。

吸い寄せられるみたいに、にゆるにゆるっと根元まであつさり入っていった。

でろでろに蕩けてしまいそうな極楽の温もりと、ちゅうちゅうと甘えるように吸い付いてくる膣壁。

挿れただけで果ててしまってもおかしくない、極上の名器だった。

「はあ……っ、ああ……♡」

「……レイ、挿れただけなのにもうイっちゃったの？」

「せ、せんせえが……いっぱい、焦らしたから……♡」

挿入ただけでそれと分かるくらいにきゅう~~~~と膣内を痙攣させ、レイは絶頂を迎えていた。

「ふふ、本番はこれからだよ？」

「だ、だつてえ……」

「ほら、もう少しだけ頑張ろう？ いっぱい気持ちよくしてあげるから」

と、レイに覆いかぶさるようにしてキスを交わす。

「んむ、ちゅ、ちゅくちゅる……♡ だ、だめ、れす♡ ちゅ、ちゅっ♡ キスされると……♡ また、イっちゃい、ます……っ♡」

「キス、そんなに気持ちいい？」

「は、はい……っ♡ ——あ……♡ んちゅっ、はあ♡ だめ♡ ちゅむ♡ ちゅる、んぢゅ♡ ちゅむ♡ んっ♡ んふう♡ んっ、んんっ♡ んふう~~~~っ♡」

唇を塞がれたまま、レイはまた絶頂してしまう。

初めてでまだ緊張だつてあるはずなのに、膣内はすっかりほぐれていた。

「レイ、クリトリスだけじゃなくっておまんこも敏感なんだね、すこく」

「そ、そんなことな——いいいい~~~~っ♡♡」

言葉を遮るようにぐりぐりっとなんををかき回すと、レイは絶頂の叫びをあげる。

「やつぱり敏感だ」

「でも……♡ せんせえだって、ほら♡ おちんちん、びくびくって♡ 暴れちゃってますよ……♡」

レイはペニスの存在を確かめるようにぎゅぎゅつと自分から膣を締めつけてくる。

「初めてでも分かるの？」

「だ、だって……♡ お、おまんこ、ぎゅーっって、おちんちんに抱き着いちゃってるから……♡ 形も、動きも♡ 全部、分かっちゃうんですっ♡」

もともとレイは身体センスが抜群だったが、それはセックスにおいてもそうなんだと思い知らされる。

そんな彼女とのセックスに、ぞくぞくと期待感が募る。

「——じゃあ、こういうのはどう？」

ぎちぎちに締め付けてくる膣壁をかき分けるようにして、ゆっくりゆっくり抽送を始める。

「あ♡ ん、はあ♡ せんせえの、おっきいおちんちん……♡ じゅぶじゅぶって、動いて♡ ん♡ ぬ♡ ぬ♡ ぐりすぎて——あ♡ 頭、ばちばちって、痺れちゃいます……♡」

「そうなんだ、嬉しいよ。レイのおまんこ、こんなふうになっちゃうくらい気持ちよくできて」

私はそっと肉棒を途中まで抜き、レイの愛液と破瓜の証でぬ

らぬらと妖しく光るさまを見せつける。

「……っ、せ、せんせえ、そんな、恥ずかしいところ、見せないで、ください……」

羞恥で頬を真っ赤に染めたレイは、両手で顔を隠してしまう。
「ごめんごめん。謝るから、顔見せて？ レイの可愛い顔見せて」
「うう……♡ っ♡ か、可愛いとか、そんなこと言われたら……ま、ますます、見せられない、です……っ！」

「ふふ、そんな風に試合中に相手から目をそらすと、大変なことになっちゃうよ？ 例えば……」

「——ひゃん♡」

顔を覆うレイの手の甲にちゅつとキスをする。可愛い声を上げながらも、一向に顔を見せてくれない。

「まだ見せてくれない？」

「だ、だって……♡」

「可愛いね、レイ」

「え……—ひゃう、ん……♡」

「可愛い、可愛い……」

可愛い言葉とともに、手の甲だけではなく、短く切り揃えられた爪の先にもキスを重ねていく。

爪は割れないように透明なコートを描いて、それでもなお、小さな亀裂が走っている。

それほどの努力を重ねてきたレイを褒めるように、指の一本

いっぱいを丁寧キスしていく。

「せ、せんせえ……♡ そんなふうに、丁寧にちゅちゅってされる……♡」

レイは顔を隠したまま無言になるが、ペニスを挿れっぱなしの膣内はきゅつきゅつと甘く締め付けてくる。

「ほら、顔隠したままだと、もつとすごいことしちゃうよ？」

「も、もつとすごいこと……ですか……♡」

そう言うレイは怖がるどころか、顔を覆う両手の隙間からチラリと期待するように瞳を覗かせていた。

そんな可愛い期待に応えたくなり、私はこう尋ねる。

「ねえ、レイは私が次に何をするとと思う？」

「え……？」

「ほら、バッテリーは相手ピッチャーが次にどんな球を投げられるか予測するのも大切だよな？ 今度はその練習」

「え、ええつと……」

「どんな予測でもいいよ。でも私はきつと、レイの弱点を責めると思う」

その言葉で私の言いたかったことは伝わったらしい。

「え、えつと、わ、私は……クリトリスが弱点だから……♡
せんせえは♡ クリトリスをぐりぐりつて乱暴にこねながら……♡ 私がバットを振れなくなるくらい、おちんぼでガンガン責めてくれる……♡ と思います……♡♡」

「正解」

レイの予想——もとい、責めてほしい場所を聞き出した私は、レイの望みどおり、そつとクリトリスに触れながら……。

「——レイ、好きだよ」

「ふえ!? あつ♡ ああああああ……♡♡」

好きの言葉のあとにクリトリスをくりくりと転がすと、レイはあつさりと陥落の声を上げた。

それと同時に膣壁が精液を搾り取ろうとちゅうちゅうつと甘く締め付けてくる。その気持ち良さに、思わず声が漏れる。

「せんせえ……♡ んつ、はああ♡ す、好きって言うのは……反則、ですよ……♡」

「ふふ、どうして？ 本心なのに」

「~~~~♡♡」

そんな私の言葉だけで、レイの身体はさざ波のような連続絶頂を味わっているらしい。

その証拠に、呼吸を荒くするレイの膣内はずつとわななきっぱなしだった。

それでもまだレイは顔を隠したままだったから。

「レイ、練習とか抜きにして、顔を見ながらしたい。だから、いい？」

促すように顔を覆うレイの両手に触れる。するとレイも、その手をそつと握ってくれる。

そうしてレイの顔がようやく見える。私からの告白と快感でどろどろに蕩けきった、誰よりも愛おしい顔が。

「レイ、好きだよ。大好き」

「も、もう……♡ ホームラン、打ってから言おうと、思ってたのに……♡」

「先に誘ってきたのはレイでしょ？」

「だ、だって……— あんっ♡ ああっ♡ も、もう明後日が今年最後の試合で、シーズン、終わっちゃうから……♡ はああ

♡ そこで打てなかったら……来年までお預けなんて……」

「そんなに私とエッチなことしたかったんだ。こんなふうにおまんこガンガン突かれたかったの？」

「あっ♡ あっ♡ あああっ♡♡ はい♡ そうですっ♡ ぶくっっておっきくなったクリいじめられながらあ♡ 大好きな先生のおちんぽ、欲しかったんですっ！♡」

いやらしく乱れるレイに興奮しながらも、彼女が口にした大好きな言葉がいつまでも反響しているようだった。それは当然だ。

レイが『ホームランを打ったら聞いてもらいたいことがある』と言ったときから、言ってくれるのをずっと待ち望んでいた言葉を聞いたんだから。

「せ、んせえ♡ ふああああっ♡ ま、またイっくう……♡♡♡」

余韻に浸る間もなく、レイはまた絶頂してしまう。想いを伝えたからか、そのイキっぱりは大胆で、とろとろになったメスの表情を余さず見せてくれていた。

「せんせえ♡ 好き好き……♡ 好きい……♡」

イキっぱなしで意識まで蕩けたのか、レイはタガが外れたみたいに好きを繰り返す。

それは言葉だけにとどまらず、甘えるように手をぎゅぎゅつと握ってきた。

「嬉しかったんですよ、私……♡ せんせえ、私の試合にいつも来てくれて、練習もいつも付き合ってくれて……♡ んん……♡♡ 私のお好きな野球も好きになってくれて……♡ こんな人、好きにならないわけ、ないじゃないですか……♡♡」

「レイ、ありがとう」

ずっと応援してきた女の子に、こんなにエロく、こんなにまっすぐ愛情を伝えられたら、我慢なんてできるわけがない。

「——レイ、まだ練習は終わってないよ？」

「うあっ♡ あんっ♡ ああっ♡ せっ、せんせえ……♡♡ あんっ♡ はああ♡ イっ、イったばっか♡ イったばかり、だからあ♡ んんっ♡ おまんこ、敏感なのにい♡♡」

私はイっただばかりできゅうきゅうとうねったままの膣内をずちゅずちゅと容赦なく突きまくる。

突き入れるたびに、とろとろの淫蜜で濡れた肉褌がねっと

りと屹立を包み込み、中出しをねだるみたいに締め付けてくる。

「せんせえっ♡♡ ああああっ♡ イクっ♡ イクイクっ♡♡
♡ はああっ♡ せんせえのおちんぽっ♡ 気持ち良すぎて♡
ずっとイッちゃううう♡♡」

「うあッ……！ いいよ、何度もイって！ レイはずっと頑張ってきたんだから、そのご褒美っ！」

「ああ♡ はあ……っ♡♡」

私の言葉が引き金となったのか、レイはまたあっさりと達してしまふ。数えきれないくらいイって、涎が垂れそうになるくらい顔は緩みきり、瞳は涙で潤んでいた。

そんな発情しきった雌の表情にたまらなく興奮して、たまらなく愛おしくなる。

「せんせえ♡♡ もっと、もっとご褒美ください♡♡」

「うん、もちろんっ！」

レイの敏感なクリトリスを腰に押しつけるようにして、ばちゅばちゅっと激しい抽送を繰り返す。

「——んおっ♡♡ おおおっ♡♡ ピ、ピストンで♡ ク
りい、潰れちゃううっ♡♡」

それまで聞いたこともないくらいレイはいやらしくて下品な喘ぎ声を漏らす。

おまんこは突き入れるたびにピチャピチャと淫液を撒き散らし、濃密な性臭を部屋中に満たしながら私たちの体を濡らして

いく。

それだけ彼女を気持ち良くできていることが嬉しくて、腰の動きが自然と速くなる。

絶頂しっぱなしの彼女の膣内は、頭がおかしくなりそうなほど気持ちよくて、どばどばと快楽物質が溢れ出ているようだった。

「はああんっ♡ あっ♡ ああ……っ♡ せんせえっ♡ これえ♡ 気持ち良すぎますうう♡♡ ふああんっ♡ ハマっちゃううっ♡♡ この練習っ、毎日したくなっちゃいますよぉっ♡♡」

「いいよ、しようっ！ 私夢中になってるから。3割30本100打点の四番バッターになれるように、これからもいっぱいしようね」

「はうんっ♡♡ さ、3割30本100打点なんて、すぐには出来ませんよっ♡♡」

「出来るまでずっと付き合うから。もちろん、出来たあとも」

「それえ♡♡ プロポーズ♡♡ ふあっ♡ あっ♡ プロポーズに、聞こえちゃいますよぉ……♡♡」

「そのつもりで言ったんだよっ？」

想いを届けるみたいに最奥を力任せに突くと、

「おっ♡ おおおおっ……っ♡♡♡ 子宮うっ♡ 奥っ、突かれながらプロポーズっ♡♡ 堕ちちゃいますうっ♡♡ せん

せえのっ、カッコいいおちんちんで♡♡ おおっ♡ お嫁さん
おまんこになっちゃいますう♡♡」

「いいよ、なつてっ!! これからもずっと、一番そばでレイの
こと応援させてっ!!」

「あっ♡ ふあああああ♡ ああ♡ イグっ♡♡ すご
いのっ、きちゃうううう♡♡」

「私も、もうッ——」

どくどくと熱いマグマが出口に向かって一挙に押し寄せ、狂
おしいほどの絶頂の予感に打ち震える。

レイが甘い言葉を叫んだのはそんなタイミングだった。

「せ、せんせえ♡ 最後♡ 最後の練習♡♡ してくださいっ
♡♡」

「もちろんっ！ なんでもするよー！」

「あっ♡ あっ♡ お嫁さんおまんこを♡ 孕ませて♡♡」
「~~~~ツツ」

私は後先考えずにレイの全身を揺さぶるように激しく突きま
くる。

オスの本能のままに愛しいメスを孕ませようと、がむしやら
に生殖器を子宮口に押し入れる。

「そこっ♡ そこおっ♡ ああ♡♡ そこが子宮口です♡♡
せんせえの孕ませザーメン、出してほしいの、そこですっ♡♡」

「うくうッ、出すよ、レイっ！」

射精を予告するように、だからと我慢汁が漏れまくる鈴口
を打ちつけると、レイの最奥がフェラチオをするみたいに吸い
付いてくる。

それはまるで孕まれたがっているみたいで。

「私も、イキますう♡ んんう♡ 子宮口、おちんちんにいっ
ぱいキスしますからあ♡ ご褒美せーえき♡ びゅーびゅーっ
て♡ おまんこに注いでくださあい♡♡」

そう言ってレイの両脚がぎゅっと背中に絡みつき、興奮で張
りつめた怒張がレイの最奥に口づけた瞬間——。

「イグっ♡♡ イックうう~~~~っ♡♡」

絶頂したレイの奥深くで、溜まりに溜まった欲望が一斉に爆
発する。

——ドブドブドビュドビュッ!!

そんな音が聞こえそうなほど勢いよく精液がレイの膈内に一
気に注ぎ込まれる。

視界が真っ白になるほどの圧倒的な快楽で、腰が抜けそう
だった。——。

「ふおおおっ♡♡ せんせえっ♡♡ ピストンっ♡ 射精しな
がらっ、奥う、ぐりぐりしゆるの、らめえっ♡♡」

「ごめんっ……! 気持ちよすぎて、腰止まらない……!」
「ふああん♡♡ 本気の種付け、すごしゅぎてっ♡♡ おふおっ

♡ イくの、止まりやにやいい……♡♡」

法悦で意識を朦朧とさせるレイはうわ言のようにそう言いながらも、私の腰に絡ませた両脚をより強く密着させてくる。

ただでさえレイの膣内に射精するのが気持ちいいのに、レイの子宮に本能のままに種付け射精するのは、全身が蕩けそうなほどの強烈な快感だった。

それまでに経験したことがないくらい続く吐精は、いつまでも終わらないんじゃないかと思うくらいだったが、ようやくおさまる。

それでも、快感の余韻を貪るようにまだレイの膣内をぐりぐりと甘く突き続けていた。

「レイ、こんなに気持ちいいこと知っちゃったら、本当に毎日したくなっちゃうかも。明日とか——」

「あ、明日でいいんですか？」

そう言っ、レイはまた繋がったままの腰をぱちゅぱちゅつと前後させ始める。

「ほら……♡ あん♡ 先生のおちんちんも、まだまだセックスしたいって言ってますよ♡」

「レイっ、射精したばかりで敏感だから……ッ」

「へへ……♡ 先生はさんざんイったばかりの私を責めてませんでした？♡」

「そうだけ……うう……っ！」

すっかりセックスのコツを掴んだのか、レイの膣内はうねる

ようにして射精直後の肉竿を扱いてくる。

「それじゃあ、先生のおちんちんのやる気を出してあげますね……♡」

すると、レイはぐいっと顔を近づけてきて、私の耳元でそっと囁く。

「私のおまんこも……♡ 先生のカッコいいおちんちんに『いっぱい種付けセックスされたぁ♡』って、言ってますよ？♡ びゅーびゅーって沢山射精して、私の子宮、精液でたぶたぶにしてください……♡♡」

「ッッ」

そんな淫らな誘いを囁かれては、体が反応しないわけがなく、すぐさま肉棒は臨戦態勢になった。

「へへ……♡ これでまた先生といっぱい種付けできますね……♡」

「レイ、さっきは練習って言ってなかった？」

「『練習は本番のように。本番は練習のように』ですよ……♡」

「……そうだね」
こうして私とレイは、夜通しベッドをぎしぎしと軋ませ続けるのだった。

レイは持ち前の驚異的なポテンシャルを発揮して、セックスにおいても私を圧倒したのはまた別の話——。

× × ×

タイガースラッガーズの勝利で幕を閉じた優勝決定戦。その翌日、レイはシーズン最後の試合に臨んでいた。

9回裏ミレニアム野球部の攻撃。2アウト満塁。奇しくも、レイがコーギーブレーブスの代打で出場したときと同じ状況だった。

2ストライク3ボールで追い込まれたレイは、間を取るよう
に打席を外す。

その時、レイは一塁ベンチ側の観客席にいる私をちらりと見た。

大丈夫、レイならできるよ。そんな想いを込めて微笑むと、レイも笑顔を見せてくれる。

再びバッターボックスに立ったレイは、バットをまっすぐ外野スタンドに向ける。ホームランを予告するように。

ピッチャーがボールを投げる前から結果はわかっていた。

打率0割9分9厘のレイがスイングする。快音は聴こえなかった。

あまりにも完璧なレイのフォームに、見とれてしまっていたから。

レイの打ったボールは、空に虹をかけるように美しいアーチを描いて外野スタンドへと伸びていき――。

割れんばかりの大歓声は、花を咲かせたレイの努力への祝福のようだった。

劇的なサヨナラ満塁ホームランを打ったレイは、ゆっくりとベースを回りながら、スタンドを埋め尽くす観客たちに向けて手を振っている。

球場で観戦していた子どもたちの頃のレイは、ホームランを打った選手の姿に目を輝かせ、憧れた。

それがいま、彼女は誰かの憧れになっている。少なくとも、私はそうだ。

ふと、レイの瞳が私を見つける。

その瞳が幸せそうに細まり、輝くような笑顔を浮かべる。その笑顔はまるでこの先の未来を予告してくれているようだった。

ホームランを打ったら聞いてもらいたいこと。

ほとんど全部聞いてしまったようなものだけど、きつとレイはこんな笑顔でまた言ってくれる。

ちようどいま、グラウンドをまわるレイも同じ言葉を口にしていた。

「――先生、大好きですー」

きつとこの先の未来でも、レイはこの想いを伝えてくれる。

いまみたいに幸せな笑顔を浮かべながら、何度だって。

だから私は、ありったけの笑顔で思いきり手を振ってレイに

応える。

これから先もずっと、一番そばでレイのことを応援しているよ。